

て挨拶を交わしました。

当時、日本人と朝鮮人の間には情が通い合っており、このような別れを惜しむ光景が、日本各地で繰り広げられたことは想像に難くありません。端島でもそうだったのでしよう。

鄭忠海氏の手記には、彼の月給が一四〇円だったとも書いてあります。昭和一九年末から二〇年という全ての物資が窮乏している時期に、会社側は彼らに不満が出ないように、高額の賃金を支払い、清潔な寄宿舎を用意し、食事也十分に提供しました。体力が低下したものは栄養をたっぷりとらせ、特別休暇を与えています。

日本企業は、ここまで朝鮮人徴用工に配慮をしていました。先述の朝鮮総督府から企業へ出された「万全の体制を取るよう」との要請は、東洋工業でも着実に実行されていたのです。

## 第十五章 自ら日本に渡ってきた朝鮮人

大勢の朝鮮人が職を求めてやってきた

「強制連行」説が全く非現実的であることは、戦前・戦中に朝鮮から日本へ出稼ぎ労働者が大量にやってきた事実からも明らかです。

前述の通り、朝鮮人の内地渡航は制限されていましたが、それでも日韓併合以来、内地における朝鮮人の人口は増え続けていました。大正元（一九一二年）年に約三〇〇〇人であったものが、大正一〇（一九二一年）年末には三万九〇〇〇人まで増えています。さらに大正一〇年から急増しており、昭和二（一九二七年）年末には一六万五〇〇〇人、そして昭和一三（一九三八年）年末にはなんと八〇万人に達しています。

朝鮮半島での「自由募集」は昭和一四（一九三九年）年に始まりましたが、その時点で既に約八〇万人の朝鮮人が日本に居住していたわけです。渡航に制限があったとはいえ、当時の朝鮮人は同じ日本国民であり、正当な手続きさえ踏めば、出稼ぎ移住は認められていました。特に

朝鮮南部の農村に住む青壮年にとって、「内地」は「成功者」となるためのチャンスを提供してくれる「夢の国」であり、多くの人々が日本に渡ってきたのです。

## 日本に憧れてきた人々の証言

ではどのような思いをもって朝鮮の人々は日本にやってきたのでしょうか。具体的な証言をあげてみます（いずれも『百万人の身世打鈴』東方出版より）。

一九二九年濟州島に生まれた權聖姫は次のように振り返っています。

「濟州島の家に帰ってみると、父の弟が日本から帰ってきていました。その叔父は五、六年も前に日本へ行ったきり便りも寄こさなかったんですが、二気そうな様子で帰ってきたんで、みんな大喜びでした。叔父の話はいいことづくめでした。その中でも私にとって印象的だったのは、白いご飯を毎日三度々食べられるということでした。私にとっては夢のような話でした。（中略）『わたしを日本に連れてって！』わたしは夢中になって叫びました。叔父にすがってせがみました。（中略）私があまりしつこく頼むので、叔父もとうとう折れて『今度行くとき連れて行ってやる』と言ってしまいました。

私はうれしくてうれしくて、天にも昇る思いで、じっとしていられなくて外に飛び出し、近くの丘に上がって大きな声でわめきました。『わたし日本へ行くんだよ。日本へ行くんだよ』

（中略）みんなは私の話を聞くと『いいわね』『いいわね』って羨ましがっていました」

彼女は一五歳になると希望通り日本に渡航し、叔父の家で生活しています。

次に慶尚南道馬山出身の裴又星は昭和三（一九二八）年に日本に渡航した動機を次のように証言しています。

「友達がなんとなく日本に行くか？ 日本はいらしいよって言うので、にわかに来てしまったんです。憧れておったんですよ。日本に行けば金儲かると思って。日本に行けば朝鮮での一年分が何か月かで儲かるんだと」

また、昭和一七（一九四二）年一〇月に「官斡旋」を受けた慶尚南道蔚山出身の李斗煥という人物もこのように語っています。

「役所に呼び出されて『日本に行ってくれ』と言われた。いやとも言えないしな。まあ正直いえば嬉しかったの。日本に来たくてもなかなか来れないんだから。韓国にあっても仕事もないし、百姓くらいだから。俺だけじゃなくて、日本に来たがってたの大勢いたんだ」

戦前・戦中を通して、朝鮮では一般の人々の間でこれだけ日本への渡航熱が高かったことがよくお分かりになったと思います。

### 戦時中の渡航者の六〇%が動員外

「自由募集」「官斡旋」「徴用」と並行して、出稼ぎの目的で大量の朝鮮人が日本にやってきました。「自由募集」期間である昭和一四（一九三九）年から一六（一九四一）年の三年間に内地に渡航した朝鮮人の総数は一〇七万一〇〇〇人<sup>（注1）</sup>ですが、このうち「自由募集」で内地に来た朝鮮人は、前述の通り一四万七〇〇〇人<sup>（厚生省統計）</sup>に過ぎません。渡航者の中には、内地と半島を往復した人の数も入っていますが、「自由募集」による渡航は、全体の一六%に過ぎなかったことも事実なのです。

この傾向は、「官斡旋」「徴用」の時期でも継続しています。昭和一七（一九四二）年一月から昭和二〇（一九四五）年五月までの内地への動員数は五二万人<sup>（注2）</sup>ですが、同じ時期に朝鮮半島からの渡航者は、延べ一三〇万七〇〇〇人<sup>（注3）</sup>です。大東亜戦争中の内地への渡航者の約六割が、「動員以外」ということになります。そして彼らのほとんどが、内地で働くために自分で希望してやってきたのです。

### 終戦時に日本にいた半島出身者の七八%が自由意志で来ていた

こうした渡航・移住によって、終戦時には約二〇〇万人の朝鮮人が内地にいたと推定されています。昭和一四（一九三九）年から二〇（一九四五）年までに約二二〇万人が増えたこととなります。終戦当時、動員先の職場にいた朝鮮人は約三二万三〇〇〇人<sup>（厚生省統計）</sup>、それ以外の軍人・軍属が約二万三〇〇〇人<sup>（引揚援護庁調査）</sup>で、合計四三万六〇〇〇人となり、これは終戦時の朝鮮人の人口の二二%に過ぎません。

残りの七八%の朝鮮人が、自分の意志で日本に渡ってきた人とその子弟、さらに動員先の職場を離脱したり契約完了後も内地に残って、日本でお金を稼いでいた人たちでした。戦時中、労働力不足が激しかった内地に、朝鮮の人々は自分から希望して大量に渡航し、日本で稼いで

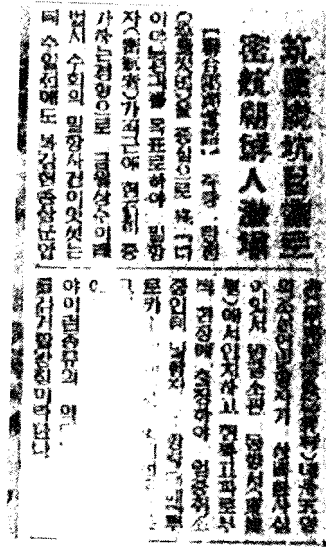
いたのです。

嫌がる朝鮮人を、拉致同然の方法で無理やり内地に連れてきて酷使したという「強制連行」のイメージとはほど遠い当時の実態を、この数字が明確に物語っています。

## 大量の人々が朝鮮半島から密航してきた

以上の通り、日韓併合以降、多くの朝鮮の人々が内地に憧れてやってきました。そして出稼ぎ渡航の資格がない人々は密航してでも内地へ渡ろうとしたのです。

その中には、炭鉱で働くために密航してくる人もたくさんいました。上記記事は昭和九（一九三四）年八月二四日付朝鮮中央日報です。タイトルは「筑豊炭坑目標に密航朝鮮人激増」となっており、当時日本の主要な炭鉱がたくさんあった福岡県の筑豊炭鉱を目標に密航してくる者が続出して、当局が頭を痛めているという内容が書いて



昭和9年8月24日付朝鮮中央日報

あります(崔碩榮氏 web「映画『軍艦島』はフェイクである』を示唆するこれだけの証拠」より)。  
内務省の統計によれば、昭和五年から一七年までの一三年間で発見された不正渡航者は四万人近くになります。実数はその数倍に上るでしょう。しかもその内訳を見ると「自由募集」が始まった昭和一四（一九三九）年以降急増しています。

もし日本の官憲による「強制連行」が本当にあったのなら、強制的に連れてこられる人間と、正式な資格をもって嬉々として日本に渡航する人間、さらに船底にもぐりこんで必死の覚悟で日本に向かう密航者が、同じ船に乗ってきたことになりました。漫画にもなりません。

それで捕まった密航者はどうなったでしょう。「強制連行」が事実なら彼らを捕まえて全員炭坑に放り込めばいいはずですが。しかし逮捕された密航者の中で、運よく就職先を斡旋されたものも一部いますが、そのほとんどは法律に基づいて朝鮮半島に帰されました。

昭和一四年から一七年までに、一万九二〇〇人(注4)が朝鮮に強制送還されています。これが本当の「強制連行」です。なお、首尾よく捕まらずに日本の会社に就職し、生活を始めてしまえば、密航者であることが発覚しても送還されませんでした。日本国民である以上、居住権があるからです。

## 差別はなかったと証言する朝鮮人

明治三七（一九〇四）年に慶尚南道義城郡ウツリで生まれた朴水竜パクスリョウは、一八歳の頃日本に渡って、東京の石井鉄工所で働きました。関東大震災の混乱で一年間朝鮮に戻りましたが、その後は再び日本で生活しました。戦時中は、朝鮮人労務者十数人の親方となって、三菱造船所で鋳打ちなどの仕事をしています。彼は戦前や戦中に差別はなかったかと聞かれて、こう答えています〔注5〕。

「差別ですか？ その頃は日本人ではだれもそういう仕事をするものはいなかったから、差別はなかったですよ。私たちの仕事はたいへん単価が安いので、日本人でやるひとがいなかったのではないですか」

また先ほど出てきました裴又星は、長い日本生活を振り返り、次のように語っています〔注6〕。

「私は差別されたなって思ったのは、一つあった。それは町内会に入れてくれなかったことだ。あんどき朝鮮人はうちだけだった。入れてくれんという。被爆者の手帳もある

ことを知らなかった。町内会に入ってはじめて近所の人に、そういうものがあるということを知って、もらった。なんで今まで黙っとったかって、言われたけど、知らなかった」

どうですか。「日本にいた朝鮮人は四六時中差別され、日本人に虐待された」という主張とは全く正反対のことをこの人たちは語っているのです。

〔注1〕 〔注3〕 〔注4〕 『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』 森田芳夫著（明石書店）

〔注2〕 『評論』 平成二二年九月号 『朝鮮人『強制連行』説の虚構』 西岡力より

〔注5〕 〔注6〕 『百萬人の身世打鈴』 『百萬人の身世打鈴』 編集委員編（東方出版）より

## コラム② 渡航を食い止めるだけでも、ひと仕事

「内地に憧がる、鮮人労働者がうかうかと渡航するを棧橋で喰止めるだけでも一ト仕事」というタイトルの記事が一九二六年三月二七日付年釜山日報に掲載されています。当局は内地渡航希望者を必死に「阻止」していましたが、それも人手不足で「阻止」

しきれないという状況を伝えていきます。

（崔碩榮氏 web「映画『軍艦島』はフェイクである』を示唆するこれだけの証拠」より）

### 内地に憧がるよ

鮮人労働者がうめくと

棧橋で喰止めるだけでも一ト仕事

釜山の旅館はソレラの者で一杯

内地に憧がるよ、鮮人労働者がうめくと、棧橋で喰止めるだけでも一ト仕事、釜山の旅館はソレラの者で一杯、

### 附け込む

不正取引や

手不足、不正取引や、

招務状、不正取引や、

一九二六年三月二七日付年釜山日報

## 第十六章 高額を稼いでいた朝鮮人労働者

朝鮮人労働者の誰もが、前出の鄭忠海氏のような恵まれた環境にあつたわけではないでしょう。炭鉱や鉱山、あるいは建設現場で厳しい労働に従事した人々もたくさんいました。しかし彼らは決して「ただ働き」を強要されたわけではなく、それどころか多くの人々が大金を稼いでいました。

### 炭鉱で月給三〇〇円

特に炭鉱のような危険な場所で働く作業者の給与は極めて高く、昭和一九年頃に九州の炭鉱で支払われた賃金は、各種手当を含めて月収で一五〇円〜一八〇円、勤務成績のよいものは二〇〇円〜三〇〇円でした（注1）。三〇〇円といえば、軍隊なら大佐の給与に匹敵します。

当時の炭鉱での賃金算定は作業習熟度や出炭量などを基に厳格に計算されており、日本人と朝鮮人の間に賃金上の差別は全くありませんでした（注2）。しかも同じ職種では朝鮮人徴用者の方が日本人徴用者より給料がよかつたと言われています（注3）。

## 朝鮮人傭夫の 物凄いの稼い稼高

被爆職業所で推賞的  
「朝鮮人傭夫の物凄いの稼い稼高」

朝鮮人傭夫の物凄いの稼い稼高は、朝鮮半島の各地に散在する被爆職業所で推賞的である。この作品は、朝鮮人傭夫の生活の一端を切り取り、彼らの苦しい労働と、戦時体制下の朝鮮半島の状況を浮き彫りにしている。特に、炭鉱での労働環境の悪さと、日本人への劣遇が、物凄いの稼い稼高の中心テーマとなっている。

右：1940年5月28日付大阪朝日・南  
鮮版より  
下：1940年4月21日付大阪朝日・中  
鮮版より

出典：『朝日新聞が報道した「日韓併合」の真実』水間政憲  
(徳間書店)



また大韓人傭夫のたひに炭坑大

### 朝鮮人傭夫に 特別の優遇設備

朝鮮人傭夫は、炭坑での労働環境が悪く、日本人に比べて劣遇を受けていた。しかし、戦時体制下の朝鮮半島では、朝鮮人傭夫に特別の優遇設備が設けられた。これは、朝鮮人傭夫の労働環境を改善し、彼らの生活を安定させるための措置であった。ただし、この優遇設備は、朝鮮人傭夫の労働環境を改善するのではなく、むしろ彼らの生活を安定させるための措置であった。

朝鮮から動員されてきた労働者は屈強な若者ばかりであり、それと比べて日本人の坑夫は高齢者が多く、体力に勝る朝鮮人労働者の給与が日本人を上回することは当然ありえたでしょう。

### 送金で「両班」となった留守宅

また、稼いだお金は朝鮮へ送金されていました。当時ある炭鉱会社の人事担当者だった人物は次のように証言しています（注1）。

「仕送りは会社のほうで強制的にやらせました。当時五〇円から八〇円位まででした。毎月五〇円送金されると仔牛一頭毎月買える勘定になります。それを貧乏人に一カ月いくらで貸すのです。牛二〇頭持てば「両班」いわゆる金持ちなんですよ」

この人事担当者も「内地人と朝鮮人に賃金の差はつけなかった」と証言しており、「もう戦争に勝つためですから、時間も何もない、しかし特に朝鮮人だけに苦勞をさせたというわけではなく、全部が苦勞しました」とも述べています。

### 殉職者へは手厚い弔慰金

徴用されて炭鉱で働くのは確かに大変だったでしょう。しかし戦場で戦っている日本人は、その比ではありません。「祖国を守る」ただそのために、敵の圧倒的な砲撃や爆撃に耐え、弾丸の最後の一発まで撃ちつくし、最後は肉弾となって散って行ったのです。

一方、朝鮮人への徴兵制度は昭和一九（一九四四）年に始まりましたが、訓練中に終戦を迎えたため、徴兵制度で召集されて戦場で戦った朝鮮人は一人もいなかったのは前述の通りです。『朝鮮人強制連行の記録』のまえがきに、朴慶植は「日本の炭鉱や土木工事場あたりを回ってみると、いたるところに朝鮮人の遺骨が放置されており……」と書いていますが、日本人の遺骨と朝鮮人の遺骨をどうやって見分けることができるのでしょうか。第一、そこは戦場ではありません。遺骨が放置されているはずがないでしょう。

それどころか、万一朝鮮人労働者が職場で殉職した場合は、丁重に葬儀が行われ、規定に基づいて手厚い弔慰金が支払われていました。前出の炭鉱会社の人事担当者は「殉職者なんかは、当時二五〇〇から三〇〇〇円くらいもらってました」と証言しています<sup>(注5)</sup>。この頃、朝鮮半島では一〇〇〇円あれば家一軒を買えたそうです。

## 日本にいれば飯場でいくらでも稼げた

「自由募集」や「官斡旋」で日本にやってきた人々には、転職の自由があったことは既に述べましたが、「徴用」で日本にやってきた朝鮮人労働者も、職場が気に入らなければどんどん「逃亡」しており、行方不明になるケースが多発しています。

では逃亡した人々はその後どのような生活をしていたのでしょう。昭和二〇（一九四五）年九月一八日付で、大阪府南河内郡長野町警察署長から大阪府警察局長あてに、「逃亡セル集団移入半島徴用工員の諸行動に関する件」という報告書が出されており、この中に金山正捐という人物が逃亡後の生活について供述した内容があります<sup>(注6)</sup>。

彼は、長野町にある吉年可鍛鑄鉄工場に昭和二〇（一九四五）年三月に配属された朝鮮人徴用工四一名の中の一人であり、その隊長だった神農大律と殴り合いの喧嘩の末、七月二八日に

仲間と共に逃亡しました。彼はその時点で二五〇円を所持していたといっています。

闇ルートで汽車の切符を入手した彼は、東京都下の立川までやってきて、西多摩郡小河内村の朝鮮人飯場に駆け込みました。親方は慶尚南道生まれの新井という人物で、「空襲で被災して逃げてきた」というとすぐに雇ってくれました。八月二日から仕事を始めましたが、その日は簡単な運搬作業を午前十一時までやって一五円をもらい午後は遊んでいます。

翌日八月三日はトンネルの中の飛行機工場で運搬作業を少し手伝って一五円をもらっています。四日は都内見物をやり、帰りに分倍河原で下車してみると、ここにも朝鮮人の飯場があり、山奥はつまらないという理由で前の飯場をやめてこちらに移りました。七日は現場で楽な測量の仕事を手伝って二〇円もらっています。

この飯場は朝鮮人労働者が三〇〇人でしたが「幽霊人口」が一五〇〇人もいたために、「食糧の配給が大変豊かだった」そうです。その中で炊事係は米を横流しして、二カ月で一〇万円儲けたと聞いて驚いたと言っています。しかも五日に一回ほど、牛を闇で一頭二五〇〇円程度で買ってきて、殺して肉を高値で売ったそうです。飯場の人々は金があり、いくらでも買ってきて食べるので炊事係はほろもうけです。さらに牛の皮だけでも一〇〇〇円で売れたとのことでした。

飯場では賭博が盛んに行われており、金山も一時は一八〇〇円まで勝ち進みましたが、結局プロの賭博師にかかって全部負けています。



八月一五日に終戦を迎えると仕事がなくなり、一足先に宮津へ逃亡していた金谷という人物を訪ね、そこで吉年可鍛鑄鉄で親切にしてくれた北井寮長のことを思い出し、二人でお詫びに寄せてもらうために長野の寮に帰ってきたと彼は供述しています。

この金谷は、やはり神農大律からいじめられたため、遠縁の金村という宮津に住む人を頼って七月一三日に逃げていました。そこで飯場を紹介され、半月で一五〇円、その次は僅かの日数で何と二〇〇円をもらいました。ただ仕事がきついたので「長野の寮のことをいつも思い出した」とも言っています。そこへ金山が東京からやってきたので、北井寮長さんが懐かしくなり、謝罪しようと思つて九月九日に寮に帰つたそうです。

戦時中でも、朝鮮人労働者は飯場でいくらでもお金を稼げたことが分かります。それでも最初に徴用工として配属された工場の寮長が懐かしくなり、お詫びするために帰ってきたと彼は語っています。「強制連行」されて日本人に虐待されたのなら、絶対にありえない話でしょう。やはり日本企業は彼らを大切にしていたのです。

(注1) (注3) 『明日への選択』平成一四年一月号「朝鮮人強制連行」問題とは何か(上)より

(注2) (注4) (注5) 『証言朝鮮人強制連行』金賛汀編著(新人物往来社)

(注6) 『在日朝鮮人関係資料集成』(第五巻) 朴慶植著編

### コラム③期限終了後も日本で稼ぐ

『証言 朝鮮人強制連行』金賛汀編著(新人物往来社)には当時契約期間が終わって帰る時の様子について、次のような炭鉱関係者の証言があります。

強制連行どころの話ではありません。お金を稼ぎに来ているのです。

「家族持ちでも一期限が終われば十二から十五世帯をまとめ係員が二人くらいついて送っていくのです。すると旦那さんが大阪か京都かどこかでいなくなるのがあるんです。こっちで心配するとこれは予定の行動で責任は一切お宅さんのほうにはありませんと子供も妻も平気なのです。旅費は向こうまでもらい途中で旦那だけ逃げる。嫁さんやなんかはそのまま朝鮮に帰っていくというのがあったですね。妻子だけは郷里へ帰り、本人は大阪かどこかでまた金儲けして帰るというふうにあらかじめ決めてあるのですね」